

土器づくり ... 1. 準備して形を作る

ここでは、土器づくりの大まかな流れを説明します。
 実際にうまく作るためには、各段階で、もう少し細かい技術が必要となります。

注意：土器づくりには、さまざまな「コツ」が必要です。とくに野焼きの時には危険な場合もあります。粘土を用意するところから、経験者に指導を受けるようにして下さい。

必要なもの

材料：粘土（ガケなどに露出していて、ねばり気のあるもの）
 川砂（粘土の10%くらいの量）

形作り：大きな葉っぱ、または、板、ぞうきん、水、タコ糸、粘土板

文様（もよう）づけ：ヘラ、縄、貝ガラなど
 野焼きのマキ：よく乾燥したもの。30cmの土器1個につき、10kgくらい（技術により変わる）

その他：シート、エプロン、など（野焼きの時には、軍手、火をつける道具、2～3mの棒など）

粘土に砂を混ぜてこねる

とってきた粘土は風通しのよい木かげなどに、くだいた状態で広げておきます（1週間以上）。

広げておいた粘土はカチカチにかわいています。石などの台の上で、ゴミをよけながら細かくくだきます。細かくくだいた粘土は、目の細かいふるいにかけて。

ふるいを通した粘土に、川砂（粘土の10%くらいの量）を混ぜ、水を加えて土を練ります。

練り上がった粘土は、むしろなどに包んで、1週間程度「ねかせ」ます。

ねかせた粘土はべたべたしますが、これがしっとりとなり、粘着力のある粘土になるまで、時間をかけて練り上げます。

（慣れないうちは、市販の粘土を使ったり、機械で混ぜてもらうのが無難かも知れません）

土器の形をつくる

粘土をダンゴにして、葉っぱ（ろくろのかわり）の上でたたきつぶして円ばん状の底にします。高さ30cmの土器で厚さ1cm以上。

次に、粘土ひもを作り、平らにのばして、はば5cm・厚さ1cmくらいの板にします。これを底の上に一段一段積み上げていきます。くっつきやすいように水を

少しずつつけて密着させます。つなぎ目をたんねんにヘラや指でこすってつぶし、すきまをなくします。

だいたい形ができたなら、口のへりを切りそろえるなどして整えます。

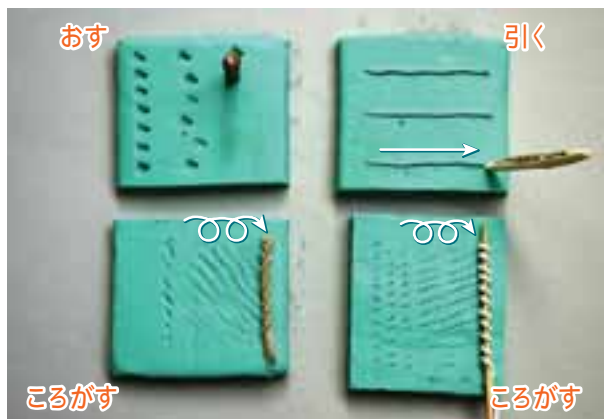
また、土器の外側と内側をヘラや小石、貝ガラなどでみがいて、形を仕上げ、水もれをふせぎます。

文様（もよう）をつける

表面が少し乾いたら、縄をころがして縄文をつけましょう。真横にころがしていくと、ななめの文様ができます。内側から手をそえて、形をくずさないように。

そのほか、細い粘土ひもをはりつけたり、ヘラなどで線を引きたり、貝ガラや棒をおしつけたりするなど、文様づけにはいろいろなやり方があります。

少し乾燥させて、表面をこすると少しツヤが出るようになったら、土器の内側を貝ガラや小石を使ってなめらかにします。水もれを防ぐためです。（土器の外側に手をそえるように）



文様のつけかた。縄を転がすと、ななめのもようができる。

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

参考：「縄文土器を作る」（帯広・原始人の会、帯広百年記念館友の会）
 「縄文人になる！」関根秀樹、山と溪谷社、2002

「燃える男の土器の作り方のページ」園田（岩宿博物館友の会会員）
<http://homepage2.nifty.com/sonodaworld/makesearthenvessel1.htm>

どき 土器づくり ... 2. のや 野焼きする

かけ干しする

できた土器は、風の当たらない日かげで、ゆっくりと乾かします。2週間くらいは干します。急に乾かす

と、ひび割れのもとです。

のや 野焼き

まず、地面を乾かすためにたき火をします。この時、まわりに土器を置いて、ゆっくりあぶります。時々土器を回し、まんべんなくあたためましょう（1時間くらい）。

土器の色が変わり、地面の水分がぬけたら空だきは完了です。

マキがオキ火（炭火のような状態）になったら平らにならし、その上に土器を置きます。

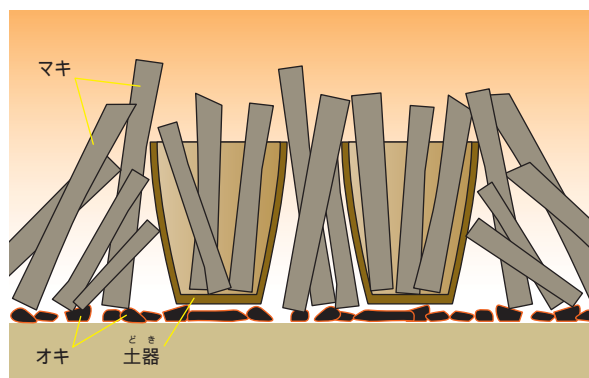
土器と土器の間や土器の中にもマキを差しこみ、さらに土器がかくれるくらいマキを周りに積み上げます。オキの熱で、マキには自然に火がつきます。

周りのマキが焼け落ちるころには、だいたい焼けています。長い棒を土器の間に差しこんで、そっと土器

をたおし、火を寄せて底を焼きます。

その後、自然に冷めるのを待ち、取り出します。土器がまだ熱い時にさわって、やけどしないように。

火を完全に消して、安全を確認したら完了です。



どきのや 土器の野焼きイメージ。マキで土器をおおってしまう。

火起こし ... 木と木をこすりあわせて

かつては、くぼみをつけた板の上で、木の棒をキリのように回転させて火を起きました。板はスギなどのやわらかい木、棒はヤマガワなどの固い木がいいようです。

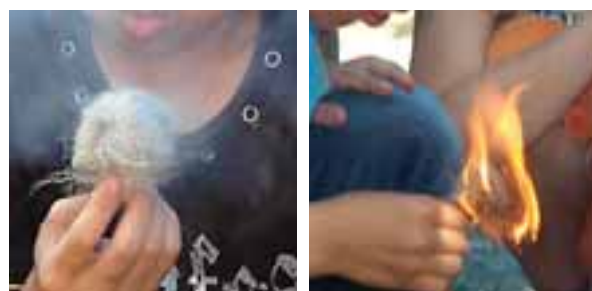
ただ、初めての人にはむずかしいので、写真のようなもう少し便利な火起こし道具（江戸時代からのものらしい）を使うといいでしょう。ひものねじりを使って回転させ、おもりはずみ車にしたものです。

木と木をこすりあわせることで「まさつ熱」をつくり出し、炭の粉をためます。そこへさらにまさつ熱を送りこむうちに、けむりが上がり、2mmくらいの炭火がとまります。

これを燃えやすいもの（ゼンマイの綿やタンポポの綿毛など。写真では麻ひもをほぐして鳥の巣のようにしたもの）に置いて包み、息をふきかけます。

もうもうとしたけむりが上がり、突然「ポツ」と火がつけます。あわてず落として、火ばさみで運びましょう。

最後に、つけた火は必ず完全に消すように。



得意、不得意はあるが、協力すれば子どもたちでも火が起きる。
(帯広市ジュニアリーダー養成講座あすかの会リーダーキャンプ)